

先月号でお話したように、先日、

僕は北海道旭川市の近くにある沼田町というところへ農地を探しに行ってきた。冬には豪雪地帯となる

この町で、JAさんをはじめ多くの方々に、心からの歓迎を受けました。

これは後で知ったことですが、僕が土地を買うためにやってくるというので、「せっかく東京から来てくれるのだから、いちばん質のいい土地を案内しなさい」と気を使ってくれたというのです。

結論から言えば、僕はこの町で大きな土地ではなく、10aという小さな単位で土地をおおうと思っています。

聞くところによると、東京の平均耕地面積は0・5haで、北海道は10〜20haだそうです。その一方で、オーストラリアでは平均耕地面積が、なんと4000haもあるそうです。つまり、いくら北海道に広大な土地を購入したとしても、オーストラリアをはじめとした世界的な視点から見れば、ちっとも「大規模農業」ではないのだということに改めて痛感したのです。

そして、これから海外の輸入農作物の関税率が下がる時代がやってくれば、日本の農業は「量よりも質」の時代がやってきます。

この町で農業をやっている方々には大変失礼ですが、質の悪い

土地で、いい品質の作物を作ることには難しいと僕は感じました。

僕はここで、「広大な土地を持っている弱み」を感じました。大量生産方式をとらざるを得なくなっているからです。だから僕は、10aから始めて、堆肥を入れ、質のよい土地を作ろうと考えています。土作りに投資をすれば、高く売れる作物が作れるのか、そして採算が合うのかを試してみたいのです。

それでは、この北海道行きの収穫は10a農地だけかと言えば、そんなことはありません。思っても見なかった「出会い」がありました。

その「出会い」というのは、「食品加工工場」です。農地を買いに行つたにも関わらず、途中でなぜだか、今は使われていない古い工場を見学することになりました。そこは元々、食品用のアルミ箔を作る工場で、1万7000坪の広大な敷地に700坪の工場が2つも併設されています。価格は5000万円とのこと。

この工場を見ているうちに、僕にはあるアイデアが浮かびました。それは、この町の名産品であるカボチャ作りのノウハウを生かして、ソーメンカボチャを大量に作ってもらう。そしてそれを使ってデザートを作るといふのです。

僕が東京・国立市で経営している

「農家の台所」というレストランでは、このデザートがとても評判がいいんです。このデザートを僕は、夕張メロン、白い恋人、ホワイトチョコレート、カニやイクラなどの海産物に負けない、北海道の新名物にしたいんです。北海道・沼田名物「ソーメンカボチャのコンポート」です。

そのためには、この町の方々からソーメンカボチャを作ってくださいたりと、町の方々の協力が大切です。僕はこの商品は売れると思っています。だからこそ、この町でソーメンカボチャを作って、そしてこの工場を活用する。そうすれば、新しい名産品が生まれ、町の雇用発生につながり、活性化にもつながる……。

考えただけでも、実に魅力的です。僕は今、迷っています。このプランを推し進めるかどうか。その前に現在取り組んでいるレストランや八百屋事業、商品の仕入れなど、もっともつとやらなければならぬことがあるからです。その一方で、僕を歓迎してくれた人たちの期待を裏切りたくありません。

もちろん、「頑張りました。でも、失敗しました」と協力してくれた人々に迷惑をかけたくありません。もう、その答えを出さなければならぬ時期なのです……。さて？

国立ファーム有限公司

高橋がなりの

アゲツのオサ

~早く「虎」に変わるんだ!~

第4回

新ビジネス展開?でも、僕は今、迷っています...